

不真面目も大切——乱調の旗手ワイルド

吉田 正俊

(共立女子大学教授)

大上段に言って真面目は大切です。しかし文芸では不真面目も大切です。ワイルドによるアレキサンダー・ポープのパロディーを借りて立言すれば——

“A little sincerity is a dangerous thing, and a great deal of it is absolutely fatal.”——

(*The Critic as Artist.*)

です。不真面目とは正調に対する乱調です。ルネッサンスは従来正調の文化が開花した時代と考えられていました。とくに日本ではそのような立場から英文学史が書かれていました。また日本の英文学界は、プロテスタント的思考が圧倒的に優勢でした。あるいはアメリカ文学の強い影響なのかも知れません。ある著名な英文学者(故人)は「ワイルドのような頹廢的な文人の作品は唾棄すべきである」と厳しい口調でワイルドを断罪していました。恐ろしい非文学的提言です。

ルネッサンス文化はホイジンガの言をかりなくとも、「複数主義」の文化だったことは明らかです。またそれ故にこそ史上まれに見る華麗な時代だったのです。人間は万物の尺度かも知れませんが、延々と千数百年続いた神の栄光が完全に崩壊してしまったとは思えません。ルネッサンスは神と人の闘い、正調と乱調の併存の時代でした。矛盾を内蔵しているのが人間で、いつもプラス・マイナスの乱闘の中に生きてきました。正調と乱調は相背きながら深い血縁に結ばれているのです。ワイルドが乱調に傾いたのは、ヴィクトリア時代の正調一辺倒に対する批評ともとれます。

ルネッサンスに続く乱調優勢の時代を「グロテスク・ルネッサンス」と評したのはラスキンでした。これは決して不幸な刻印ではありません。時代の下りすぎる無謀を恐れず言うならば、ワイルドこそグロテスク・ルネッサンスの豪華な花です。プロテスタント風にグロテスクを「欠点」と考えてもかまいません。「欠点」にはなにか妬ましい魅力があります。「女性は男の欠点ゆえに男を愛する」(ワイルド、以下引用すべて)ではありませんか。そして「悪女とは男が決して飽きないような女性」なのです。戦争についても同様です。「戦争が悪であると見なされている限り、戦争の魅力はなくなるらない」のです。人間



は二つの大戦を経験して、性懲りもなくまた第三次大戦を準備していますが、「戦争は卑俗であると考えてこそ、はじめて戦争は人気を失う」のです。戦争仕掛人にワイルドの言葉を教えてやりたい。

欠点や秘密がなかったら、人間は極めてつまらない動物になります。たとえ秘密がなくても「あるかのように」想像していればよいのです。「秘密なき女性」の美はそこから生まれます。ヴィリエ・ド・リラダンの『アクセル』(1890)はW. B. イエイツが感動した長編劇詩です。3億5千ターラーの宝物を手に入れた女性サラは、アクセル伯と抱擁してから、楽しい旅の夢を語ります。ベンガル、ノールウェイ、スウェーデン…「楽しいでしょうねえ」とうっとりするサラに向かって、アクセル伯は楽しい夢は実現する必要がないと駁し、二人は歓喜のうちに毒盃を仰いで息絶えます。想像力が現実に打ち克つのです。

ブルーストの描くブルジョアの家庭のひとり息子マルセルも、ノルマンディー海岸で逢った娘アルベルティヌに心惹かれ、いつかは彼女と口付けしたいと思い、そのときの恍惚境を想像して楽しめます。しかしその好機が到来したとき、マルセルはがっくりしました。彼女のざらざらした顔の皮膚や、黒い鼻孔が、彼の幻想を叩きこわしてしまったのです。こんな筈じゃなかった。口付けを想像していたときの方がはるかに幸せだったと思うのです。私たちが口付けをするとき、目を閉じてするのはまことに賢明ですね。目を開いたままキスをするのは中条ふみ子だけでしょう。

灼きつくす口づけさへも目をあけてうけたる我をかなしみ給へ

このような想像力優位の姿勢や、現実無視の態度は、ヴィクトリア文明にひたっている人から見れば「ふざけるな」と言いたくなる不真面目な処世術かも知れません。しかし文芸はいわゆる「正常」な世を裁くことさえ許される筈です。「真面目」を告発するのではなく不真面目「も」大切だと言うのです。

以上は小生が昨年お話したこととは大分内容が異なりました。しかし「大切な問題を語るときは、内容よりも言い方が重要である」とワイルドが言っていました。お許し下さい。